# 牛鍋

森鷗外

鍋(なべ)はぐつぐつ煮える。

牛肉の紅(くれない)は男のすばしこい箸(はし)で反(かえ)される。白くなった方が上になる。

斜に薄く切られた、ざくと云う名の葱(ねぎ)は、白い処が段々に黄いろくなって、褐色の汁の中へ沈む。

箸のすばしこい男は、三十前後であろう。晴着らしい印半纏(しるしばんてん)を着ている。傍(そば)に折鞄(おりかばん)が置いてある。

酒を飲んでは肉を反す。肉を反しては酒を飲む。

酒を注いで遣(や)る女がある。

男と同年位であろう。黒繻子(くろじゅす)の半衿(はんえり)の掛かった、縞(しま)の綿入に、余所行(よそゆき)の前掛をしている。

女の目は断えず男の顔に注がれている。永遠に渇しているような目である。

目の渇（かわき）は口の渇を忘れさせる。女は酒を飲まないのである。

箸のすばしこい男は、二三度反した肉の一切れを口に入れた。

丈夫な白い歯で旨（うま）そうに噬（か）んだ。

永遠に渇している目は動く腭（あご）に注がれている。

しかしこの腭に注がれているのは、この二つの目ばかりではない。目が今二つある。

今二つの目の主（ぬし）は七つか八つ位の娘である。無理に

上げたようなお煙草盆（たばこぼん）に、小さい花簪（はなかんざし）を挿している。白い手拭（てぬぐい）を畳んで膝（ひざ）の上に置いて、割箸を割って、手に持って待っているのである。

男が肉を三切四切（きれ）食った頃に、娘が箸を持った手を伸べて、一切れの肉を挟もうとした。男に遠慮がないのではない。そんならと云って男を憚（はばか）るとも見えない。

「待ちねえ。そりゃあまだ煮えていねえ。」

娘はおとなしく箸を持った手を引っ込めて、待っている。

永遠に渇している目には、娘の箸の空（むな）しく進んで空

しく退いたのを見る程の余裕がない。
暫（しばら）くすると、男の箸は一切れの肉を自分の口に運んだ。それはさっき娘の箸の挟もうとした肉であった。
娘の目はまた男の顔に注がれた。その目の中には怨も怒もない。ただ驚がある。
永遠に渇している目には、四本の箸の悲しい競争を見る程の余裕がなかった。
女は最初自分の箸を割って、盃洗（はいせん）の中の猪口（ちょく）を挟んで男に遣った。箸はそのまま膳の縁に寄せ掛けてある。永遠に渇している目には、またこの箸を顧みる程の余裕がない。

娘は驚きの目をいつまで男の顔に注いでいても、食べろとは云って貰(もら)われない。もう好い頃だと思って箸を出すと、その度毎に「そりゃあ煮えていねえ」を繰り返される。

驚の目には怨も怒もない。しかし卵から出たばかりの雛(ひな)に穀物を啄(ついば)ませ、胎を離れたばかりの赤ん坊を何にでも吸い附かせる生活の本能は、驚の目の主(ぬし)にも動く。娘は箸を鍋から引かなくなった。

男のすばしこい箸が肉の一切れを口に運ぶ隙(すき)に、娘の箸は突然手近い肉の一切れを挟んで口に入れた。もうどの肉も好く煮えているのである。

少し煮え過ぎている位である。

男は鋭く切れた二皮目で、死んだ友達の一人娘の顔をちょいと見た。叱(しか)りはしないのである。

ただこれからは男のすばしこい箸が一層すばしこくなる。代りの生(なま)を鍋に運ぶ。運んでは反す。反しては食う。

しかし娘も黙って箸を動かす。驚の目は、ある目的に向って動く活動の目になって、それが暫らくも鍋を離れない。

大きな肉の切れは得られないでも、小さい切れは得られる。好く煮えたのは得られないでも、生煮えなの

は得られる。肉は得られないでも、葱は得られる。

浅草公園に何とかいう、動物をいろいろ見せる処がある。名高い狒々(ひひ)のいた近辺に、母と子との猿を一しょに入れてある檻(おり)があって、その前には例の輪切(わぎり)にした薩摩芋(さつまいも)が置いてある。見物がその芋を竿(さお)の尖(さき)に突き刺して檻の格子の前に出すと、猿の母と子との間に悲しい争奪が始まる。芋が来れば、母の乳房を銜(ふく)んでいた子猿が、乳房を放して、珍らしい芋の方を取ろうとする。母猿もその芋を取ろうとする。子猿が母の腋(わき)を潜(くぐ)り、股(また)を潜り、背に乗り、頭に乗って取ろうとしても、芋は大抵母猿の手に落ちる。それでも四つに

一つ、五つに一つは子猿の口にも入る。

母猿は争いはする。しかし芋がたまさか子猿の口に這入っても子猿を窘めはしない。本能は存外醜悪でない。

箸のすばしこい本能の人は娘の親ではない。親でないのに、たまさか箸の運動に娘が成功しても叱りはしない。

人は猿よりも進化している。

四本の箸は、すばしこくなっている男の手と、すばしこくなろうとしている娘の手とに使役せられているのに、今二本の箸はとうとう動かずにしまった。

永遠に渇している目は、依然として男の顔に注がれている。世に苦味走ったという質(たち)の男の顔に注がれている。

一の本能は他の本能を犠牲にする。

こんな事は獣にもあろう。しかし獣よりは人に多いようである。

人は猿より進化している。

(明治四十三年一月)

底本：「普請中　青年　森鴎外全集2」ちくま文庫、筑摩書房
1995（平成7）年7月24日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版森鴎外全集」筑摩書房
1971（昭和46）年4月～9月刊
入力：鈴木修一
校正：松永正敏
2003年8月20日作成
2005年11月15日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。